GANTZ～PARALLEL～

ヤンデルー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＡＮＴＺ～ＰＡＲＡＬＬＥＬ～

【Ｎコード】
Ｎ９４６１Ｘ

【作者名】
ヤンデルー

【あらすじ】
マンガ「ＧＡＮＴＺ」を小説化！！

０００１　ある事件

２０１０年１１月２日　８：２０

東京にある小さなアパートでこの物語は始まる・・・

主人公の名は「再藤（サイトウ）　宗次（ソウジ）」１６歳。高校２年。身長１７８ｃｍ。頭は良くないが運動神経が良い。

ピンポーンと宗次の家のチャイムが鳴る。その音で宗次は目覚めた。

宗次「んっ、何だよ。もう朝かよ・・・」

ドタドタと玄関まで進みチャイムを鳴らした人物に声をかけた。

宗次「竜也っ。ちょっと待っててくれ。」

チャイムを鳴らした人物は「大橋（オオハシ）　竜也（タツヤ）」宗次とは幼稚園からの親友。

竜也「おうっ。早くしろよ」

８分後、身じたくをすませた宗次が出て来た。

竜也「お前なぁ、毎日毎日ちょっとは早く起きろよな」

宗次「ワリぃ　ワリぃ」

宗次と竜也は話をしながらアパートの駐輪場まで行きバイクに乗っ

て学校へと向かった。
２０分程度バイクで走ると二人の通う学校に着いた。
二人が入って行くと学校の入り口付近でたまっていた数人のグループが
逃げるように去って行った。

宗次「じゃあ、また」

竜也「おうっ」

二人は学年は一緒だがクラスが違うため別々の方向へと向かって行った。
午前の授業が終わり宗次はいつもどうり中庭のベンチで昼飯を食べながら竜也を待っていた。
しばらくすると竜也がやって来た。

宗次「竜也っ。遅かったな。」

竜也「ワリぃ。おれ何か今日体調悪いから学校帰るわ」

宗次「大丈夫か？」

竜也「おう」

言われて改めて竜也を見ると顔色が悪く今にも倒れそうな感じだった。

その日の授業が終わり宗次はいつもの習慣で竜也の教室に行く。
だが、もちろん竜也はいない。
宗次もようやくそのコトを思い出した。

宗次（あっ、竜也いねぇーんだった・・・）

宗次が帰ろうと振り返った瞬間
ドンっ
宗次は何かにぶつかった。

？？？「痛ぇーなあ」

よく見ると宗次がぶつかった相手は3年生だった。

宗次（ちっ）「すいません・・・」

3年生「ナメてんのか俺をよぉ」

宗次のいけ好かない態度に腹を立てて3年生がつっかかってきた。

宗次「だったら何だよ」

宗次も負けずに言い返す。
するといきなり3年生は宗次に殴りかかって来た。
宗次はそれを右にかわして3年生の腹に思いきりパンチを決めた。

3年生「ぐぅっ！」

3年生は宗次の1，2メートル前でうずくまっている。
宗次が歩み寄ろうとする・・・
その瞬間3年生は低い姿勢でタックルをしかけてきた。
宗次はそれすらも見切り
タックルに合わせて3年生のあごに膝蹴りを決めた。

宗次「ふぅーっ」

3年生は完全にのびている。
宗次は大きくため息をつくとその場から立ち去った。
宗次がバイクで家に帰る途中行きつけのコンビニに寄るのを忘れていた。

宗次（あっ、しまった晩ごはん買ってきてねぇ）

宗次はめんどくさりながら来た道を戻って行った。
宗次は自分の分の晩ごはんにお弁当だけ買ってコンビニから出た。
宗次がバイクのエンジンをかけていると向こうの方から
猛スピードでバイクが走って来ている。

宗次（何だ？）

宗次（アレって、まさか・・・）

バイクが近づいて来て気づいた。
そう、そのバイクに乗っていたのはさっきの3年生だった。
バイクは段々宗次に近づいて来る。

宗次（ヤバい！轢かれるっ）

宗次は焦りでバイクのカギを開けれない。
3年生の乗ったバイクはもう目と鼻の先まで来ている。
宗次は奇跡を信じて走り出す、
だが無情にも宗次と3年生の乗ったバイクとの距離は縮まっていく。
ドーーーンっ

宗次はバイクとぶつかった衝撃で地面に体を強く叩きつけられた。
意識が段々薄れていく・・・

宗次（ウソだろ・・・俺もう死ぬのか？嫌だ死にたk
プツンッ

宗次「はっ！？何だよココ？」

０００２　不可解な部屋

宗次「何だよココ？」

同じ学校の３年生に轢(ひ)かれたはずの宗次は
轢かれた次の瞬間どこかのマンションの一室にいた・・・。

宗次（何なんだよ・・・ココ？病院か？）

そう思い部屋の中を見渡すがとても病院には見えない。
部屋の中はいたって普通のマンションの一室、
部屋の真ん中にある直径１メートル程のチタンのような物でできた
黒い玉以外は・・・

宗次（何だあの玉？それにココも・・・んっ？何やってんだおれ、
帰ればいい話じゃねーかよ）

宗次は今いる状況を無視して帰ることにした。
だが、玄関のドアに手をかけた時また新しいコトに気が付いた。

宗次（ハっ？何だこのドア？開かねぇーっつうか触れねぇ・・・）

宗次は嫌な予感がして全てのドアや窓、壁を確めたが全部触れない。
それどころか、携帯電話の電源も入らずどれだけ大きな音を出して
も全く反応がない。

宗次（マジかよ・・・閉じ込められた）

宗次は勇気を出してあの黒い玉を調べるコトにした。

恐る恐る手を近づける・・・
あと３０ｃｍ、１０ｃｍ、５ｃｍ・・・
ついに玉に触れた、だが別に何も起こらない。
そう思った瞬間・・・
黒い玉から何かレーザーのようなものが出てきた。
このレーザーは何かを書き出している、人だ。
書き出されている人は足からどんどんとその場所からはえてくるようだ。
ジジジッ
レーザーが人を書き終えた、女の子だ。

女の子「キャァーーッ」

宗次「うわぁっ」

女の子「ハアハアっ。あれどこココ？」

宗次（何だ？人が出てきたぞ。
　あんなの今の科学でできねぇーだろ）

女の子は宗次と同じように部屋中を見渡している。

女の子「あのー、何ですかここ？」

宗次「えっ、あの俺も気づいたらここにいて・・・
　ここが何か全然わかんねぇーんだよ」

女の子「・・・」

宗次「・・・」

二人の間に気まずい空気が流れた。

女の子「あのっ、帰っていいですか」

宗次「いやっ、何かドアや窓に触れなくて
　この部屋以外にはいけねぇーんだ」

女の子「・・・」

女の子は宗次をおかしいヤツと思ったのか、
何も言わず玄関の方へいった。

宗次（何だよっ。人がせっかく教えてやったのに）

女の子「アレっ、ウソなにこれ？」

宗次（だから、言っただろーが）

女の子は帰ってきて他のドアや窓を調べた。
もちろんどれにも触れない。

宗次「無理だって、おれも全部確めた」

女の子は諦めてその場に座りこんだ。

女の子「あの、名前聞いてもいいですか？

宗次「あっ、名前？おれは再藤宗次。君は？」

女の子「私は「鈴村（スズムラ）　茜（アカネ）」です。中3です。」

宗次「おれは高2で、バイクではねられて気づいたらここにいたんだ」

茜「私はストーカーに追いかけられて、捕まって後ろからナイフで刺されてここに・・・」

宗次「ナイフで刺された？」

茜「はい」

宗次「なぁ、やっぱりおれらって死んだんじゃないかな・・・
　ここが天国なんじゃないかな？」

茜「えっ、でも息もしてるし心臓だって動いてますよ」

宗次「そうだけど・・・」

ジジジジっ
いきなり黒い玉からあのレーザーがでた。

茜「うそっ、何これ」

今度は3人一緒に書かれている。
男の人が2人に女の人が1人。

ジジジッ
3人同時に書き終わると3人が口をそろえて言った。

3人「はっ、どこだよここ？」

3人はどうやら知り合いらしい
部屋を見渡しながら3人で話合っている。
すると3人組の男が1人茜に聞いてきた。

3人組A「あの、何ここ？病院？」

茜「わかりません」

3人組A「俺達さぁ山道を車で走っててカーブ曲がれずにガードレール突き破って崖から落ちたのに
傷1つ無いんだけど・・・もしかして死んでるの俺達」

宗次「おれもバイクではねられてここに来たんだ」

3人組A「やっぱり死んだのかな」

宗次「そうかもな・・・ここからは出れねぇーし」

3人組A「・・・」

ジジジジッ
また1人部屋に来た。
ゴツい筋肉質の男性だが、黒くてピチピチのラバースーツのような物を着ている。

0003　ガンッ

この部屋に驚く程、似合わない黒いピチピチのラバースーツのような物を着た男がやって来た。

宗次（何だアレ？・・・コスプレ？）

スーツの男「また使えなさそーなヤツばっかりだな・・・邪魔くせぇ」

黒いスーツの男が小声でささやいた。
それを聞いた三人組の男が怒った。

三人組Ａ「何だよ使えねーって？いい年してコスプレしながら死んだのか？ダッセェー」

スーツの男「あぁん？何だとコラ」

部屋に緊張感が漂う・・・
ジジジジッ
しかしそこにまた人がやって来た。
今度は多い１，２，３，４，５人もいる。
身長からしておそらく小学生だろう
ジジジッ
小学生達は気がつくと部屋で騒ぎ出した。

小学生Ａ「うわっ！何だココ？」

小学生Ｂ「俺達トラックにぶつかったんじゃなかったっけ？」

小学生C「な、何アレ？」

ジジジジッ
次から次へと連続して3人が部屋に来た。
マジメそうな青年とインテリ風の男、２０代後半の女性・・・
だが、みんなあの黒いスーツを着ている。

インテリ風の男「多いな・・・今回」

女性「そうね」

女の人が素っ気なく答える。

いきなり青年が叫んだ。

青年「ふぅっ。全員聞いてくれ！俺の名前は細川（ほそかわ）　佑一（ゆういち）だ。
　ここにいる人間はまだ生きている！」

3人組B「生きてる？それにまだってどう言うことだ？」

細川「これから全員で星人と呼ばれるヤツらを倒しに行くことになる・・・
　　これは本当の戦争なんだ」

しーん
一気に部屋が静かになった。

宗次（コイツ何言ってんだ？）

3人組B「星人？何それ？頭おかしーんじゃねーのお前」

細川「信じないならそれでいい。けどちょっと待て

あーたーらしーいあーさがきた
きーぼーうのあさーだ

突然部屋中にラジオ体操の歌が流れた。

茜「えっ？何なのこの歌・・・」

よろこーびにむねをひーらけ
おおぞーらあーおーげー
ラジオーのこーえにー
すーこやーかなむねをー
このかおーるかぜーに
ひらーけよ
そーれ　いっち　にっ　さんっ

宗次「は？どー言うこと？」

歌が終わると黒い玉に文字が浮かび上がった。

てめえ達の命は、
無くなりました。

新しい命を
どう使おうが
私の勝手です。

という理屈なわけだす。

3人組A「はぁ？意味わかんねぇよ・・・コレ」

玉に表示された文字が変わっていく・・・

てめえ達は今から
この方をヤッつけに行って下ちい

スイミン星人

特徴
つよい
ねてる

好きなもの
まくら．仲間

口ぐせ
おはよーさんっ！

黒い玉にはスイミン星人と呼ばれる異様な姿をした生き物が映し出されていた
長方形の頭に人間の耳にあたる部分からはイソギンチャクのような物が生えている
だが顔は普通で体も中学生のそれと変わらない物である。

宗次「・・・スイミン星人？何なんだよ今から何が始まるんだよっ」

茜「星人を倒す？な、何で私達が？」

細川「今は質問はなしだ！とにかく俺の言うことを聞いてくれ！」

部屋がまた静かになった。

細川「もうすぐガンツが開く！そしたらその中からこのスーツを出して

全員スーツを着てくれ！！」

3人組A「はっ！？ふざけんなよっ！そんなダセぇ服着れるかよ・・・」

宗次「ガンツって何だ？」

細川「ガンツはこの黒い玉の名前だ！」

ガシャーン

ガンツの左右と後ろの部分が開いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9461x/

GANTZ〜PARALLEL〜

2011年11月16日16時00分発行